

東北放送

事業の名称

NEWNEWS 学生プロジェクト「ニュースの皮むき」

共同で事業を実施した団体

- ・ 東北大学学友会報道部（共同企画実施：t b c ニュースの内容検証及び実地取材）
- ・ 松栄フルーツセンター（取材先：東日本大震災の津波で被害を受けた・東松島市矢本）
- ・ K I B O T C H A（取材先：被災校舎をリメイクした震災伝承防災減災教育施設・東松島市野蒜）

事業概要

t b c ラジオで毎週月曜・19:30～21:55放送中の自社制作番組「NEWNEWS」（番組パーソナリティは漫才コンビ・ニードル）では、「東北大学新聞」を制作している「東北大学学友会報道部」の学生（東北大学に在籍）に出演していただき、新聞の内容や制作にまつわるエピソード、学生の日常などを紹介するコーナーを展開してきた。そして、メディア及び制作活動に興味・関心を持つ大学生と共に「メディアリテラシー」への理解を深め、必要性を考えることに取り組むコーナー企画を展開し、放送することで、出演者のみならず聴取者に対しても知る・考えるきっかけを作ることにした。

具体的には、これまでt b c ラジオ・テレビで放送された「ニュース」の音声を聴き、番組パーソナリティのニードルと学生がこの「ニュース」を通して知りたいと思ったことを放送内で列挙し、実際に「ニュース」として放送に至るまでに伝える側がどのような取材や視点を定めていったのか？ また「ニュース」として伝え切れなかったことなど、背景に潜むものを知り、1つの「ニュース」の皮を剥き「種」に辿り着くことで「ニュース」ができるまでのプロセスや事実・真実を知った。

この体験を基に、次に番組パーソナリティのニードルと学生が共に同じ場所に取材に赴き、ラジオ及び新聞の取材活動を行うことで、取材者それぞれの感じ方や切り口、表現の違い等について知り、考える機会を作ることにした。特に当社放送エリアは11年前に発生した「東日本大震災」で大きな被害があった地域である。今回取材先として選んだのは、番組パーソナリティのニードルの出身地である東松島市。市民1,110人の命が犠牲になり、市内全世帯の97パーセントの家屋に被害があり、その復興に多くの力が注がれた街である。特に津波の被害を受けた国道沿いの果物店「松栄フルーツセンター」と、被災した校舎をリメイクし震災伝承と防災減災教育の拠点として民間が運営する「K I B O T C H A」の2カ所を取材。「東日本大震災」からの復興は今も続いていることを改めて知る機会となり、故郷の変化を感じる番組パーソナリティと震災当時小学生で初めてこの地を訪れた学生が、被災地の「今」をそれぞれの立場で知り、感じながら「何」を伝えようと考えたのかを音声取材した。これを番組

内で放送し、その後スタジオでそれぞれの意見を述べてもらうことで、出演者と聴取者が情報を適切に理解・解釈・活用する力、つまり「リテラシー」の視点を持って、メディアに接する機会にしてもらいたいと考えた。

また、番組パーソナリティのニードルが「東北大学新聞」の取材に同行し、研究を行う教授にインタビュー取材を行うことで、大学生が制作する「新聞」の取材を体験し、どのような視点を持つことができたのかといった実践も併せて行うことにした。

事業の成果

本企画実施に際し、東北大学学友会報道部員の5人の学生を中心に企画に参加（番組出演）していただいた。tbcラジオ・テレビで発信した「ストレートニュース」（仙台市青葉区作並地区の廃校を活用した「ドローンスクール」開校）について、学生らと番組パーソナリティのニードルがそれぞれの立場で分析。仙台市近郊の観光温泉地である「作並」が実は稲作を中心とした「米作り」が盛んに行われていた地域であることや、少子高齢化で閉校した作並小学校が地域のコミュニティ拠点としての機能を有していたこと、地域外に住む若い人達がドローンスクールに参加することで、この地に移住し農業に取り組むことに興味も示していること、このスクール開校に向けての地域と行政の間で交わされてきた思いの交換など、「ストレートニュース」には収まり切れなかった「事実」を、tbc報道部でこのニュース取材を担当した記者と共に「紐解き」を行うことで、学生にとって新たな「作並」のイメージを想起することにつながることができた。こうした取り組みを基に、同じ取材対象を数多くの人が同じ時間に取材することでどのような違いが出てくるのか、その違いを知ること、番組パーソナリティと大学生、それぞれが持つ「リテラシー」の意識を引き出し、その様子をラジオ番組内で放送することで、聴取者に「ニュースを読み解く力」を知ることや興味を引き出すことに努めた。

特に取材先が「東日本大震災」で大きな被害があった地域であり、ニードルにとっては故郷だが、大学生にとっては初めて足を踏み入れる地域という地縁の違い、現地に向かう交通手段も異なるなど、当初から「リテラシー」を意識した取材手法と構成に努めた。その結果、同じ取材先でも別々の人を取材対象に選び、ニードルは思い出を振り返る質問、大学生は取材先の将来に向けた提案など、互いの違いを知ることにつながった。特に、本企画の放送のエンディングで、出演した大学生の一人が「ラジオは相手の息遣いをまで伝えられるメディアであり、取材先の人を持つ熱量によって、記者が記事を作成する新聞とは違った伝え方ができる」という感想を述べてくれた。取材先が同じでも、メディアの違いによる、伝わり方の差異を感じてもらい、そのコメントを放送することができたことは大きな成果と感じている。

また、番組パーソナリティのニードルのGAKIOが学生らと一緒に「東北大学新聞」の取材を行った。東北大学大学院情報科学研究科の松宮一道教授の研究テーマ「運動時、心で複数の体を感じていることを発見」について、一般の聴取者にわかりやすく質問することでより伝えやすい答えを引き出し、大学で行われている研究がより生

活に身近なものであることを伝えることができた。学生側はこの内容を2022年5月発行の新聞に掲載。今後、メディアの違いによる伝え方の違いを分析していく機会を作っていければと考えている。

以 上